

古代倭国史の再構築

認識理論と科学的方法に則って

「蝶の雑記帳 130-0」 序説

この「蝶の雑記帳 130」のシリーズでは、上に掲げる表題で構想している書物の草稿を、各章ごとに順に公開する予定です。すでに二三の書物で発表している日本古代史に関する考察内容に、新たにいくつかの重要な論点を加え、多くの新しい図も加えて、よく整理できた一つの倭国史を構築したいと思います。これまでの拙著を再整理するという意味を込め、できたら 600 年代までの日本の歴史を中国史書の書く「倭国」の歴史として体系的に叙述しようとする試みです。

予定では次のような章立てになります。来年の前半までに完成できるでしょうか。人を引きこむような推理の展開を心がけます。

第Ⅰ章 太陽崇拜様式「太陽の道」と歴史的变化

第Ⅱ章 水田稲作の伝播が年月を要すること

第Ⅲ章 到来した稲作がもたらした歴史の展開

第Ⅳ章 書かれた歴史資料に切り込むために

第Ⅴ章 弥生時代の倭国

第Ⅵ章 古墳時代の倭国

第Ⅶ章 600 年ころ国家制度を整えた倭国

第Ⅷ章 600 年代中ごろからの倭国の絶頂期

第Ⅸ章 700 年代の新王朝

終章 論を終える

2023 年の秋、インターネット・ニュースで、次のようなおもしろい記事を見つけた。——“壱岐の前小島に小島神社というパワー・スポットがある。名高いモン・サン＝ミシェルのように、干潮になると砂州が現われて参道となり、その神社に参拝することができる”——。ピンと来るところがあつてさらに調べると、web にたくさんの紹介記事がある。満潮時に島の手前に立つ鳥居が厳島神社の鳥居のように海中に立っている写真もある。前小島は壱岐東岸の良港内^{うち}海湾の奥にあるが、湾の南西およそ 1.5km のところで「原の辻遺跡」という弥生遺跡が発掘されており、古代に内海湾の周辺が壱岐の中心域だったと考えられる。注目すべきことに、小さな前小島全体が神域とされて小枝一本持ち出すことが禁止されているという。

国土地理院地図で調べると、『倭国はここにあつた 人文地理学的な論証』⁽¹⁾で「太陽の道」の神殿であると論じた宮地嶽神社が真東にある。前小島のピークは北緯 33.780092 度、宮地嶽神社の神殿は北緯 33.779935 度、驚くべき精度で同一緯度線上にある。これは「太陽の道」ではないか。前著では宮地嶽神社から壱岐へ張り渡す東西線上に特別の小島があるとは気づいていなかったが、今回の発見は、長門二見夫婦岩—沖ノ島—対馬神ノ島^{ごう}を通る東西線「太陽の道」のほかに、もう一つ、宮地嶽神社—壱岐前小島を通る東西線「太陽の道」があつたことを示唆する。

本書の目的は、上の新たな発見を契機にこれまでの見方を一新し、日本古代史の枠組みを整理して組み立てなおし、古代倭国の社会・政治・宗教の発展史を整合的に再構築することである。

序 説

日本古代史にとって不幸なことに、研究の端緒につまずきの石が置かれている。その石とは『古事記』と『日本書紀』と呼ばれる書物である。とりわけ『日本書紀』は、700年代初期に国家によって「史書」として編修されたが、それを編む国家自体がどのようにして成立したかを記述する体制の公式文書として編修された。すなわち、『日本書紀』は、当時の国家「日本国」が自らの正統性を主張する「イデオロギー」の書として書かれたのである。このことは、『日本書紀』を資料としてその記述に寄りかかる歴史理解が、イデオロギーによる制約を受けず偏りのないものとなるかに疑問を突きつける。東アジアで書かれた中国・朝鮮の古代史資料と比較しても、当該国家の正統性をこれほど整然と順序だてて記述している資料はめずらしく、事実性に疑問を生じさせずにはおかない。実際、現行の日本古代史のパラダイムを信奉する研究者たちさえ、さまざまな疑問点を指摘して、『日本書紀』の記述を多かれ少なかれ割愛したり変更したりして解釈をほどこしている。厳密に考えれば、その手法は恣意的と言わざるをえない。これまでの日本古代史の研究はそのような制約のもとで行なわれてきた。この条件を無視してはいけないというのが、本書の出発点である。

『日本書紀』は、造化の神話から書き始めることによって記述する時代をあいまいにし、それでいて人代を^{えと}干支を用いる年代で長大な歴史に見せかけ、日本国が治める領域も漠然と「天の下」のような表現によってその領域が特定されないような記述の仕方をする。この記述法は、よく分からない古い時代を表現するのに選ばれたと考えられなくもないが、中国文明をさかんに取り入れていた700年代の政治制度や文化の水準に必ずしもふさわしかったとは思えない。“最初の歴史書”となつて日本国の正統性を主張することを目的とするこの書物は、よく言われるように編修時に多くの書き入れがなされたのなら、支配の時間

的始まりと支配の領域をもっと明確に表示することもできたはずである。これらの点は史料批判として議論されるべきである。

史料批判を抜きに読めば、『日本書紀』の書きぶり全体は、「日本」もしくは「倭」の王が古くから日本列島西部一帯を支配した、その政治体制は変わることなく続いてきた、と理解するように求めている。そして、現在通用している日本古代史の解釈・説明は、『日本書紀』のその主張を基本的に受けいれてなされている。この理解は現代的な学問の水準に適合しているだろうか。

試金石となる一例を挙げて検証しよう。江戸時代に福岡市の^{しかのしま}志賀島から「漢委奴國王」と彫られた金印が出土した。その三行五文字「漢・委奴・國王」を「かんの・わの・なの・こくおう」と読む、と以前の社会科教科書に書かれ、今でも金印を展示する福岡市博物館がそう説明する。この読みは、根拠を述べることなく明治以来そう読まれているというような表現で流布し、一般的な通念となっている。その読みが国中を闊歩していて、歴史家考古学者と呼ばれる人もしばしば、一般の人に説明するときこの読みを利用する。しかし、少しでも批判的に考えようとする人のなかに、この五文字の読みが学問的な水準の定説たりえると納得する人はいったい何人いるのだろうか。日本最古の金石文のこの読みには、日本の古代史研究がはらむ困難が露呈している、とわたしには思える。

出土した歴史資料である金印「漢委奴國王」を、学的議論の対象として考察しよう。出土物金印が歴史資料として扱えるというのは一般的に承認されていて、それに反する証拠はない（著者の判断はのちの章で述べる）。この出土物に関連する文献的な資料として中国の歴史書『後漢書』——430年代の南朝「宋」で200年以上前の「後漢」の歴史を^{へんさん}編纂した書物。編纂者は^{はんよう}范曄。後漢当時から記されていた原資料である書き物とその後の二次的な書物を編修してできた。『後漢書』は、時代

的にはあとの魏・呉・蜀の時代を書いた歴史書『三国志』よりも 150 年ぐらい遅れて編纂された——がある。それに対し、日本側に残る資料は『古事記』と『日本書紀』だけである。その二書は、初期にはほとんど王家の系譜しか記さず、金印が授与された AD57 年ころの歴史資料として参考にできる内容をもたない。これが、この問題をとりまく史料状況である。

倭国について『後漢書』は、「建武中元二年(AD57 年)、倭奴國^{みつぎ}貢^{ちやうが}ヲ奉ジテ朝賀ス。…。光武^{たま}賜^{いんじゆ}ウニ印綬ヲ以テス。安帝永初元年(AD107 年)…、倭國王帥^ら升^{せいこう}等、生口百六十人ヲ獻^{せいけん}ジテ請見ヲ願ウ」と書く。志賀島で出土した金印はそのとき授けられた印と解釈するのが妥当である。

『後漢書』の書く倭奴國の「倭」を金印では彫りやすい文字「委」で代用した（おそらく発音記号で「wi」）、とする理解が成り立つ。文中の「倭奴國」は国の名を指し、その国名「倭奴」は、漢文の慣例に従って、二文字を連続して当時の発音で「w*d*もしくは w*n*（母音を*で記す）」のように読むのが順当だろう。流布している「わの・なの」という読みは、1860 年生まれの日本の歴史学者が 1892 年に提案したものだが、「倭」の王が古くから日本列島西部一帯を支配したとする『日本書紀』の主張以上の根拠をもたない。当時の日本社会を支配した皇国史観という歴史パラダイムがそうさせたと考えるほかない。

今日の実証的・科学的な学問の方法からすれば、上のような史料状況からして、国名「倭奴」の発音は正確には不明としておくのが厳正なあり方だろう。ところで、『後漢書』は「倭奴國」とある文に続いてすぐ「倭國王帥升」と書くから、こちらの「倭國王」は金印をもらった「倭奴國」王の後継者であり、「倭國王」と呼ばれた人「帥升」は「倭奴國」の王であるとするのが最もすなおな読みである。すなわち、「倭奴國」の王である「帥升」を簡略に「倭国王帥升」と呼び換えた、という推論が導かれる。『後漢書』の短い文章に、これ以上論理の通った解釈を与

えることは困難である。

ところが、『後漢書』の編纂者^{はんよう}范曄は、後漢よりも前の前漢についての史書『漢書』と後漢のあとの魏呉燭についての史書『三国志』を読んだうえで後漢の歴史を編纂したから、『後漢書』に書かれた「倭国」ということばは、前後の歴史についての知識を含んでいるのである。だから本当は、その知識を含んだうえで解釈をほどこすことが必要である。しかし、拡大した議論をすると、この序説の当面の目的を離れてしまうので、無理なく言えることだけつけ加えよう（余分なことを加えていないことは本文で明らかになるだろう）。『後漢書』について上に述べた理解を基本的に変えず、『漢書』が書く「倭人」と『三国志』が記す「倭国」について最小限の知識を加味して言い換えれば、中国側は、「倭」と概括的に呼ぶ領域を代表する後漢の時代の王に金印を与えたが、その王が直轄する国の固有名は「倭奴國」だというような認識をしているということだ。つまり、『後漢書』は、『日本書紀』が主張するような「初代王以来倭の王は奈良の地域にいたが、その王の支配する領域内の一つの小国が後漢に使いを送って金印をもらった」というようなことを一言も言っていないのである。すなわち、金印の三行五文字を「かんの・わの・なの・こくおう」と読むような理屈は成立できない。

上の議論は、本書のアプローチがどのようなものを、金印の問題を一例にとつての提示である。見てのとおり本書は、ポパーの言う反証可能な根拠を挙げてする科学的方法に準じようとしている。わたしはポパーの「三世界論」などの哲学に組みする者ではないが、「独断的な立論から始めるのではなく、反証可能な根拠を挙げて推論を進める科学的方法」と言われているアプローチが、——必ずしもそれほど明確な規定を示しているわけではないけれども——、学問的な歴史解釈の体系を構成するために必要である、と考える。上の議論が教えるように、明確な論拠を示さずに金印の五文字を「かんの・わの・なの・こくおう」

と読んで開始するような歴史解釈は、ポパーの科学論が要求する基準に適合してはいない。学問的な歴史研究の場で、神話を「昔からこのように言われている」と説明するのと同じやり方で、「明治以来そう読まれている」というような根拠をもたない言説を提示することは控えなければならない。副題に掲げた「科学的方法」にはそのような意味がこめられている。

科学的方法是、後漢が東アジアのいくつかの国に与えた「金印」やそれをもらった「倭国」が、当時のその領域の歴史を論理的に整序する概念として存立できるかを検討する場合に必要なのである。上では限られた問題空間で議論しているが、『後漢書』の短い文章の蓋然性の高い理解の仕方が、『日本書紀』の「奈良地方を本拠とする王が古くから日本列島西部一帯を支配した」という独断的な主張よりも合理的で納得がいくことは明らかだろう。後者の論法は、「倭国」についても「金印」についても根拠があって内容のある論理的関係を提示することはできない。つまり、科学的な議論を可能にしない。

現在では、ポパーの「反証可能性」の理論に対して批判がある。たとえば、科学論ではT. ケーンの「パラダイム論」が重要だとされる。しかしそこでは、両者が完全には同じ問題空間で論争しているのではないということに注意が足りない、とわたしは考える。ケーンのパラダイム論では、支配的なパラダイムが学界を覆って、科学的と言える批判もパラダイム自体を覆すことができないとされる。それは、パラダイムと呼ばれているものが認識論上の枠組みを規定していて、その枠組みが支配的になった学界で枠組みそのものを問題にすることを困難にしているからである。たとえば、ニュートン力学は常識的な時間・空間概念を前提としていたが、相対性理論は、その力学の枠組みの外に出て、前提そのものを問うことによってニュートン力学に勝る体系を構築したのである。

したがって、その種の問題に正しく対処するためには、認識論的に考えて、必要なら設定されている枠組みそのものを考え直さなければいけない。それはたやすいことではないが、歴史のような現実的だが把握のむずかしい事象を扱う場合にも、認識枠組みに留意していることが必要なのである。そうしなければ、気がつかないうちに異なる問題空間を設定して互いに論争し、実りのない水掛け論に陥ってしまう。そういうことを反省できるように、大仰だが本書の副題で「科学的方法」の前に「認識理論」ということばを加えた。よほど気をつけないと掲げたこの副題は空念仏に終わるだろう。高い蓋然性をもつ歴史理論は、そういう方法を意識しながら構築するのでなければいけない。カントの『純粹理性批判』の二つの序文は、ユークリッドの『幾何学原論』とニュートンの『自然哲学の数学的原理』の二つの理論体系の枠組みを念頭に、認識と思考において理論体系の枠組みはどのように組み立てられるべきか、認識・思考はどのように為されなければならないかその原理と方法を説こうとしているのである。最近『西洋古典名言名句集』というアンソロジーで、「正しく発想すること、配列すること、言い表わすこと」という格言に出会った。この格言が念頭から離れないようにして、以下考えていこう。

認識枠組みの重要性を述べたが、模範例である幾何学やニュートン力学では、反論しようのない公理や、誤りであることを示しえなかった常識的な時間・空間概念と発見した運動の法則を出発点とする認識枠組みを構成し、論理だけで諸概念を組み立て理論の体系を構成している。現代、科学的体系と呼ばれている経験的事象をあつかう理論もみなそのように構築することをめざしている。歴史学も例外であってははいけない。歴史事象を認識するための明確な枠組みを構成し、しっかりした根拠をもつ概念を導入しながら、それらの概念を論理的に組み立て関係づけて歴史理解の体系を構成することを心がけなければならない。

だから、日本古代史についても、共有できる議論の場を形づくるように理論枠組みを模索しなければいけない、と思う。

成功するかおぼつかないが、本書では、第一部の第Ⅰ～第Ⅳ章で、古代の歴史事象の一般的な考察に適合できる枠組みをつくり出すことを試みよう。人間社会を特徴づける二つ三つの基本的な概念を選び出し、それらの概念が体现する年代的变化を参照軸としてなんとか問題空間を形づくり、古代日本列島でそれらの基本的特徴が原初的なあり方からどのように変化していったかを探求してみよう。そのアプローチが、第Ⅴ章以降で、重要な歴史事象に、根拠をもつ客観的で合理的な関連を見出して、日本古代史の体系的な理解をもたらすことを期待して。

問題空間をつくる三つの参照軸として、第一に古代この列島で暮らした人々の文化特にアニミズム的心性を特徴づける「太陽信仰」の軸、第二に日本社会の基盤となる「水田稲作」という生活軸、第三は日本の初期社会を世界史に共通する段階的発展ととらえる初期共同体モデルの軸を採用しよう。第一の軸は、すでに前著で展開した「太陽の道」という概念であるが、それは、アニミズムからのちの神社信仰までを通観することを可能にする。古代倭国の文化や宗教を理解するのに役立ち、倭国の祭政一致の政治を理解する視点をもたらすだろう。第二の水田稲作は日本社会のあり方を後世まで規定したから、この軸を時間的に伸ばして眺めることは、古代倭国の体制や文化の発展を理解するうえで役立つだろう。これまでの研究では倭国史を独特のものとして世界史共通の普遍的な見方をするのが少なかったが、第三の軸は、そういう倭国史の取扱い法を改める視点をもたらすだろう。

第Ⅰ～第Ⅳ章がどこまで成功して倭国史の科学的な研究に資するか自信はない。ともかく、そういう広い問題意識に開かれた思考枠組みを設定し、あとの章で、あらためて、年代ごとに具体的な歴史事象に取り組んで論理的な考察検討を心がけ、反証可能な科学的方法に則る倭国史の再構築をめざす。

参考文献

- (1) 谷川修『倭国はここにあった 人文地理学的な論証』, 白江庵書房, 2021 年.

2024 年 5 月小満

海蝶 谷川修

